

小学校における英語の教科化に向けての試行：  
小学校教員への質問紙調査と文字指導

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八木橋, 秀夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00010222">https://doi.org/10.14945/00010222</a>

# 小学校における英語の教科化に向けての試行

—小学校教員への質問紙調査と文字指導—

八木橋 秀夫

Teaching English as a Subject in Elementary School:

A Survey of Elementary School Teachers and Reading and Writing of English

Hideo YAGIHASHI

## 1 問題の所在

小・中・高を通じた英語教育全体の充実が、新しい学習指導要領を検討するにあたり議論され、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（文部科学省 2013）において、小学校 3・4 年で外国語活動を行うこと、そして 5・6 年では英語を教科として扱うことが示された。

教科としての英語の特徴である以下の 2 点が、従来の外国語活動とは大きく異なる。1 点目の特徴は 4 技能を指導することである。従来の外国語活動が「話すこと」「聞くこと」の指導に絞られていたのに対し、教科としての英語では「読むこと」「書くこと」も指導する。2 点目の特徴は、教科としての英語が、「学習の定着」を目指している点である。「話すこと」「聞くこと」に関しては「～できる」という目標が設定されている。

この教科としての英語について、「教員がどのように指導するか」という問題がある。「論点整理」（文部科学省 2015）では、教科としての英語の指導体制として、「学級担任が専門性を高め指導、併せて専科教員を行う教員を活用、ALT 等を一層積極的に活用する」とある。しかし、小学校教員に話を聞いてみると、実施への不安の声を聞くことが多い。その教員の不安は何が起因しているのだろうか。「第 2 回小学校英語に関する基本調査」（ベネッセ教育研究センター 2011 以下ベネッセ調査）では、「教材の開発や準備のための時間」「ALT などの外部協力者との打ち合わせの時間」が現在の外国語活動の大きな課題として指摘されている。しかし、外国語活動を経験している教員と経験していない教員によって考え方に違いがあると思われるが、上記の調査においてはその違いは明らかになっていない。小学校教員が抱える全体像を捉えつつ、外国語活動の経験の違いに注目して問題点を整理することは、今後の教科としての英語の実施に向けて必要なことを示す手がかりになると考えた。

また、前述した 4 技能の中でも、「読むこと」「書くこと」を含めた文字を指導することでも問題が生じるだろう。上記の「論点整理」によると、「読むこと」や「書くこと」に慣れ親しみ、文字に対する興味を育てるとしている。つまり、どちらも児童に定着を求めているわけではない。このねらいの達成に向けて、文部科学省は、①アルファベットの文字や単語などの認識②国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き③語順の違いなど文構造への気付きの 3 点が学習できるような教材である「Hi Friends! Plus」を作成し、現在研究開発校で先行実践している。この「Hi Friends! Plus」内には、アルファベットを読んだり書いたりすることを児童自身が自己評価する「Can-Do リスト」が示され、その中には「アルファベットの小文字 26 文字を正確に書くことができる」など、アルファベットを理解することができたかどうかについて自己評価する項目がある。教員が評価する上で、「読むこと」「書くこと」の定着を求められてはいないが、興味関心が

高まるような効果的なアルファベットの指導法を実践すれば、自然と理解も高まることが理想であろう。アルファベットの理解は中学校の英語への円滑な接続にも結び付く。

## 2 研究の目的と方法

### 1) 小学校教員が現在の外国語活動や教科としての英語にどのような課題や不安を抱えているのかを明らかにする。

F市の小学校教員に対して、質問紙調査やインタビュー調査を行うことで、現在の外国語活動や教科としての英語への意識を調査した。質問紙調査については現在の外国語活動の課題や教科としての英語の不安要因を調査するだけでなく、外国語活動の経験の有無や実践方法がどのような影響を及ぼしているのかについても関連付けた調査を行った。インタビュー調査は、F市において外国語活動を推進している教員に外国語教育の課題について語ってもらった。これらを分析することで、教科としての英語を進めていくうえで生じる問題点を整理し、今後必要なことを提案できると考えた。

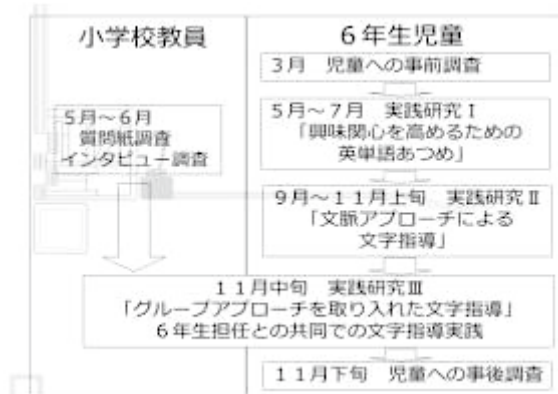


図1 アクションリサーチのプロセス

### 2) 小学校における文字を「読むこと」「書くこと」の指導法を検証する。

6年生児童に3つの文字指導を実践することを通して、その有効性と問題点を検証した。本研究における文字指導は、アルファベットの文字の認識を高めることに重点を絞って学習計画を構想した。児童がアルファベットを理解する方法として、単語全体をとらえるトップダウン処理と、文字1つ1つの読み方を知り、それを組み合わせるボトムアップ処理の2つの方法がある(アレン玉井 2008)。これらを組み合わせて実践することが有効であるとの指摘もある(畑江 2015)ため、本実践においても双方を取り入れた指導を試みた。考察する際には、指導法が最終的に児童の興味関心や文字の理解につながったかについて検証するだけでなく、その前提となる児童のレディネスがどのような影響を与えるのか、そして、実践していく中で、どのように文字の理解と興味変容していったのかについても分析を行った。

また、小学校教員にとって文字指導は初めての経験であり、指導することに対して不安感もっていることが予想される。よって、実践Ⅰ、Ⅱの省察をふまえ、実践研究Ⅲの際に計画した文字指導については小学校教員と協働で実践した。授業を実践する中で、小学校教員が抱える不安要因と変化についても分析を行い、小学校教員の不安軽減に向けての提言にもつなげていく。

## 3 小学校教員への調査

F市の教員345名に質問紙調査を実施し、有効な回答288を分析に使用した。有効回答率は83%であった。加えて、地域の中で外国語活動の実践を特に進めている教諭4名、校長1名に、小学校教員が抱えている課題についてインタビュー調査を行った。得られた発言をナレッジ・マネジメント法を用いて整理し、質問紙調査の結果と照らし合わせた。その結果わかったことを以下の4点に示す。

第1に、「指導する教員の英語力」に対する意見がもっとも多いことがわかった。特に、教科としての英語への不安において、上記の項目は高い数値を示した。興味深いのは、インタビュー調

査において、外国語活動を推進している教員からも不安視する声が上がったことである。授業の熟達者から意見が上がるということは、程度の差はあるにせよ、多くの小学校教員が英語を使うことへの不安を抱えているということであろう。しかし、外国語の研修機会が多いとはいえ、急激な英語力の向上を望むことは難しい。よって、英語を流暢に話すことができなくても、資源を効果的に活用して授業を実践することが重要であろう。質問紙調査において、外国語活動の実践経験を積むことが抵抗感を和らげることにつながることが示された。最初はうまくいかなくても、経験を積むことが大切である。質問紙調査から、F市において外国語活動の実践経験がある教員が51%にとどまっていることが明らかとなったが、今後は4学年にわたって外国語教育を行うこととなる。英語への抵抗感を感じていても、授業に真摯に取り組み、経験を積もうとする姿勢が必要である。

第2に、小学校教員が人的資源と物的資源の必要性を強く求めていることがわかった。質問紙における「教科としての英語に必要な支援」においては、「専科教員の補充」「ALTの補充」の回答が多かった。外国語活動の実践経験のある教員が、教科としての英語への不安の中で、特に外部協力者の支援を求めている傾向にあったことから、学校現場では人的な資源を求めていることがわかった。また、インタビュー調査からは教材の不足が指摘された。5・6年生に向けての外国語活動開始当初、多くの教材が作成、購入されたが、副教材の変化や担当教員の異動により、十分に活用できていない現状がうかがえた。

第3に、「研修」の問題があることがわかった。インタビュー調査からは、校内での研修教科に設定されにくいことや、授業を見る機会がないことがあげられた。

第4に、「読むこと」「書くこと」の指導への不安を小学校教員が抱えていたことがわかった。質問紙調査においても、『読むこと』『書くこと』の指導への不安を多くの教員が抱えていた。そこで、実践Ⅲにおいて、外国語活動への抵抗感を感じている2名の教員に文字指導の実践を依頼し、教員の意識の変化について分析を行った。授業を実践するのは、質問紙調査における教職経験年数と抵抗感の関係において、強い抵抗感を示した経験年数5年以下の教員と、30年以上の教員の2名を選出した。抵抗感を持っている教員でも、資源をうまく活用することができれば、教科としての英語に対しても自信をもって取り組むことができると考え、今回の実践を通して、小学校教員の意識が変容することを期待した。

#### 4 文字の指導について

##### 4-1 実践Ⅰ 文字に興味をもつための英単語あつめ

F市立K小学校の6年生児童128名に文字を扱った指導を行った。児童が身の回りにある文字に興味をもつことと、トップダウン処理、ボトムアップ処理双方の理解を促す指導法である。実践内容は図2の通りである。

- |                                |
|--------------------------------|
| 1 児童は授業前に、見つけた英単語を色紙に記入する。     |
| 2 T1（又はALT）が提示し、1文字ずつ読み方を確認する。 |
| 3 単語としての読み方を確認する。              |
| 4 掲示板コーナーに頭文字ごとに掲示する           |

図2 実践Ⅰの概要

実践の事前と事後において、児童に大文字と小文字を書かせる調査を行い、その正答数を比較した。児童の興味関心の高まりについては、各授業の最後に「文字への興味関心」について、5段階評価で振り返り用紙に記入させた。分析にはその平均値を用いた。

実践 I の結果、児童の「文字への興味関心」の平均値は 5 段階中 4.0 であり、児童に比較的受け入れられたといえる数値を示した。また、児童の大文字の平均正答数は 21.8 から 23.3 に、小文字の平均正答数は 14.8 から 19.2 にそれぞれ上昇した。大文字は高い正答数を示したが、小文字については正答数も低く、事後の分散が 55.8 とばらつきが大きいことがわかったため、以降は小文字の理解度と興味関心の変容について調べることにした。実践 I 前の段階で小文字を 20 問以上正解している群を上位群(42 名)、10 問～19 問正解した児童を中位群(48 名)、9 問以下の児童を下位群(38 名)として、それぞれの興味関心の数値と文字の正答率を比較した。

その結果、上位群の興味関心の平均値は 4.4、中位群は 4.0、下位群は 3.7 となった。各小文字の正答率は、上中位群に関しては、中位群の f を除けばすべてが 50%を超えていた。一方、下位群に関しては、c、o、s など大字と似ているものの正答率は高いが、多くの文字で正答数が 50%を下回っていることがわかった(図 3)。

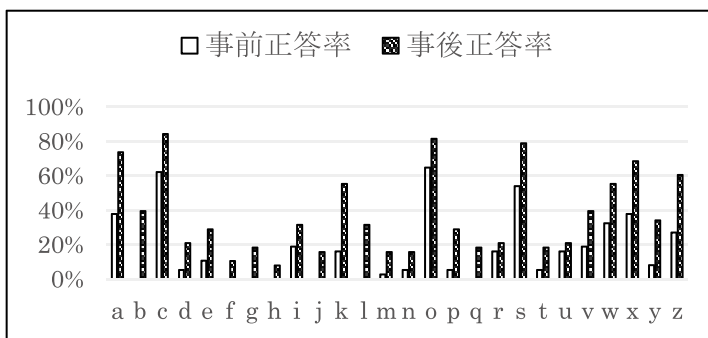


図 3 下位群の小文字正答率

学習経験者の割合は、上位群 64%、中位群 27%、下位群 21%であった。中位群、下位群の多くは学習経験の少ない児童が多い。その中でも特に下位群の正答率の低さが顕著であった。本実践では、大文字と小文字すべての文字を使用したため、どの文字を学習するのか、学習の明示性が明らかではなかったことが理解につながらなかったと考えられる。小文字を理解できていないことが興味関心の数値に影響を及ぼしている可能性も考えられた。

#### 4-2 実践 II 文脈アプローチによる文字指導

実践 I より学習の明示性を高めるため、学習の流れに沿って文字を学習する「文脈アプローチ」による文字指導を試みた(図 4)。実践後、実践 I と同様の方法で分析を行った。その結果、興味関心の平均値は 4.1 となり、実践 I と同様児童に受け入れられたといえる数値であった。平均正答数も実践 I 後の 19.2 から 21.0 に増加した。実践 I において分類した 3 群を再度比較すると、上位群の興味関心が 4.4、中位群が 4.1、下位群が 3.8 となり、実践 I と類似する結果が得られた。しかし、下位群の各文字の正答率をみると、f や j など、ローマ字では学習しない文字の正答率は低く、繰り返

- 1 毎時間小文字 26 文字中 2 文字ずつを扱う。
- 扱う文字は単元にてでくる単語の中の文字にする。
- 2 文字の書き方とアルファベットの読み方と音を確認する。
- 3 「Hi Friends! Plus」デジタル教材内の単語を紹介する
- 4 実践研究 I の掲示板コーナーの単語とも関連付ける。
- 5 「Hi Friends! Plus」内にあるワークシートに記入させる。
- 6 授業の最後の振り返り用紙でも単語を書き写す練習をさせる

図 4 実践 II の概要

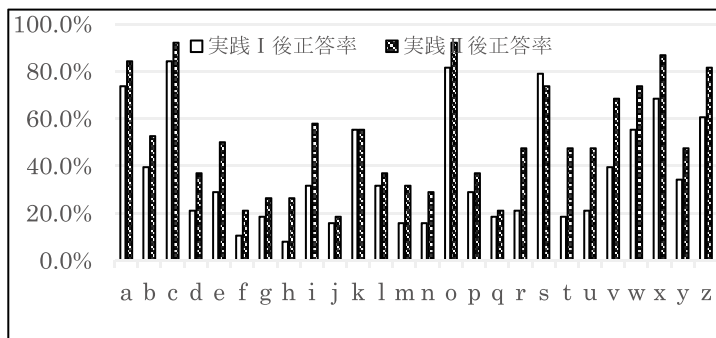


図 5 実践 II 後の下位群の正答率

し慣れ親しむ必要性を感じた(図 5)。また、興味関心については、本実践において興味関心の数値の基準である 3.0 を下回った児童が中位群に 2 名、下位群に 6 名いた。これらの児童は実践Ⅰにおいても文字に興味を示さなかった児童であった。8 名のうち、文字への興味関心の数値は低い、振り返り用紙における「友達への気付き」の数値は高い児童もいたため、友達との関わりを通して自然に文字を使う活動の必要性を感じた。よって、実践Ⅲにおいては、「グループアプローチ」を取り入れた授業実践を試みることにした。

#### 4-3 実践Ⅲ

##### ① グループアプローチを用いた文字指導

「グループアプローチ」とは集団との協同の経験によって児童の変容を促進する活動である。本実践は、文字を介して友達と関わるという、児童の情意面に訴える活動を通して、文字への興味関心と理解の深まりをねらった。小文字は正答率が低い 12 文字を実践に用いた。実践の概要は図 6 の通りである。

実践Ⅲの結果、興味関心の平均値は 4.3 であった。上位群の数値は 4.5、中位群の数値は 4.3、下位群の児童の興味関心は 4.0 であった。下位群の児童については、文字の理解についても、f、g、h の正答率の伸びが顕著に見られた(図 7)。

実践Ⅱにおいて「文字への興味関心」の数値が低かった児童 8 名のうち、6 名の児童は数値が上昇したが、実践Ⅱの「友達への気付き」の数値の高さと、本実践の「文字への興味関心」との関連性は見られなかった。

##### ② 学級担任による文字指導

実習校である F 市立 K 小学校の 6 年部の教諭 2 名に実践を依頼し、それぞれの実践後にインタビュー調査を行った。1 度目の実践においては「英語を話すことへの抵抗感」や「独特の雰囲気」などの、授業への抵抗感を示す意見が学級担任からあがったが、担任自身が実践したことで学級の中に安心感が生まれ、「学級担任が実践するよさ」も感じたことがわかった。

2 度目の実践においては、「英語を話すことへの抵抗感」に関する発言はあったが、「授業への自信」に関する意見が多くあげられ、経験することの重要さが裏付けられた。文字指導についても「教材が整っていればできる」「ある程度同じであれば教師も安心する」など、両教諭とも、実践できるという思いをもった。ただし、両教員とも「学級担任が実践するよさ」を感じながらも、「教材の整備」「時間の不足」などの影響が大きいと、実践することの難しさを述べていた。

## 5 結論

### (1) 今後必要な準備について

F 市小学校教員を対象とした質問紙調査では人的な資源、インタビュー調査からは物的な資源

- 1 文字を 4 文字選択し、それぞれの文字のカードを 8 枚ずつ、計 32 枚用意する(32 人学級)
- 2 授業の開始時に児童に配布する。
- 3 授業で扱う 4 文字の音と書き方を確認する。
- 4 T1 や ALT に続いて、指でなぞり書きをする
- 5 指でのなぞり書きする活動を通して、同じ文字をもった友達を探す
- 6 全員揃ったらその場にすわる。
- 7 指定された座席に座り、当日学習した 4 文字を含んだ単語を書く

図 6 実践Ⅲの概要

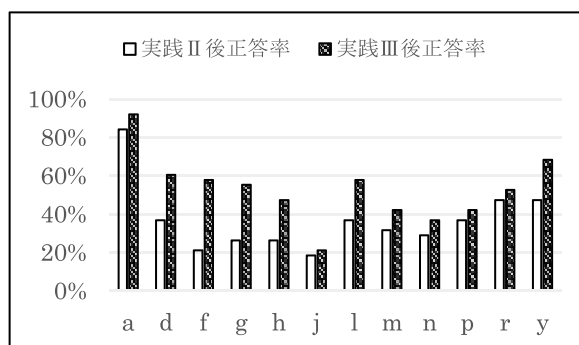


図 7 実践Ⅲ後の下位群の正答率



の必要性が明らかとなった。両調査からは、新しい研修機会の必要性もあげられた。学校内外で授業を見たり、英語を学習したり、学校間で情報交換したりする機会など、新しい研修体制の構築も求められる。

しかし、これらの準備を通して最も必要であるのは、教員が外国語教育を前向きにとらえて、自分で実践しようという、「意識の準備」である。実践Ⅲの学級担任による文字指導の実践において、実践した教員は授業を重ねていけば自信をもってできるという思いをもった。学級担任が関わることで、児童の安心感につながるのは間違いない。専科教員等、外国語活動を推進するような教員が各学校に配置されるとしても、自身のできる範囲で授業に参加し、議論を重ねていくべきだろう。よって、専科教員にも、自分が指導できればよいという姿勢ではなく、学級担任らと共に実践しようとする「意識の準備」が求められる。

## (2) 児童のレディネスを意識した指導について

小文字を「書くこと」を学習する段階において、児童の知識の差が顕著であった。そのため、児童のレディネスに沿った活動を実施していくことが必要である。具体的には①明示性をもった学習②軽重を付けた文字の指導③自然と文字を使うことができる活動が求められる。

指導形態については、例えば図8のような方法が考えられる。短時間学習の中では、「グループアプローチ」を取り入れた文字指導を行う。活動を伴って文字を学習することで、自然な文字の理解を促す。授業の中では、「文脈アプローチ」を取り入れ、自分が伝えたい単語を書く。この方法であれば、トップダウン処理とボトムアップ処理の双方を連動させることができる。

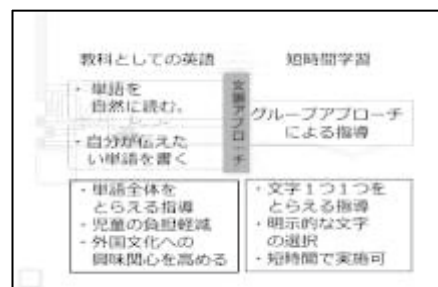


図8 教科としての英語の指導例

## (3) 今後の展望

外国語教育への不安を抱えている教員には、本アクションリサーチの結果をもとに、授業公開や指導法の提案を行い、教員の自信が高まるよう啓蒙に努める。今後各学校へ配置されていくであろう、外国語教育を推進する教員に対しても、その役割を本研究の結果をもとに意見交換し、円滑に教科としての英語が開始できるよう努める。

また、本単元は、アルファベットの認識に注目して分析を行ったため、英語との音声の違いに着目することはできなかった。今後は文字や単語の音声の違いに興味関心の高まりと結び付けて調査していくことも必要である。

## 参考文献

- アレン玉井光江(2008)「公立小学校における効果的なリーディング指導について(1)ーアルファベット指導についてー」、『千葉大学教育学部研究紀要』56, pp15-23
- 畑江美佳(2015)「読み書き能力の素地作りのために小学校からできることーPhonemic Awarenessを促す外国語活動の実践ー」、『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要』5, pp. 11-20
- ベネッセ教育研究センター(2011)「第2回小学校英語に関する基本調査」
- 文部科学省(2015)「論点整理」
- 文部科学省(2013)「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」